The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	福沢諭吉とムハンマド・アブドウの近代科学知識の啓蒙 : 『訓蒙窮理図解』と『コーラン注釈』を中心に
Author(s)	Harb, Hassan
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58290
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【2】

氏　　名	Harb Hassan Kamal Hassan（ハルブ ハサン カマル ハサン）
博士の専攻分野の名称	博　士（日本語・日本文化）
学　位　記　番　号	第　２４２３３　号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 22 年 9 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	福沢諭吉とムハンマド･アブドウの近代科学知識の啓蒙－『訓蒙窮理図解』と『コーラン注釈』を中心に－
論 文 審 査 委 員	（主査） 日本語日本文化教育センター教授　嶋本　隆光 （副査） 法学研究科教授　森澤　一史 世界言語研究センター教授　竹田　　新 世界言語研究センター教授　山根　　聡 日本語日本文化教育センター准教授　佐野　方郁

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、福沢諭吉（1835-1901）の科学知識の啓蒙の仕方を明らかにすることを通じて、日本の近代化の一面を探る試みである。本論では、日本の近代化の実際をより正確に具体的に理解するために、同時代のエジプトの事例と比較検討した。両国の近代化の代表者として、福沢諭吉とムハンマド・アブドウ(1849-1905)の啓蒙思想の相違点を把握すること

によって、日本とエジプトでは西洋の科学知識がどのように受け止められたのか、その一面を知る試みである。1868年に出版された『訓蒙窮理図解』において紹介されていた科学知識の中で、人々の日常生活に深くかかわっている「熱」を一例として、福沢とアブドウの啓蒙・説明の仕方を取り上げて検討した。

以上の点を明らかにするため、三つの異なった比較を行った。第一に、『訓蒙窮理図解』が出版される前後、ならびに幕末と明治初期に広く読まれた科学書と比較・検討した。これらの書物の中で用いられた科学知識の紹介・啓蒙の仕方を、『訓蒙窮理図解』と対比させることにより、福沢の科学知識の啓蒙の特徴を明らかにできる。第二に、福沢が書いた『訓蒙窮理図解』と、本書の執筆に際して準拠した西洋の科学書の原本を比較・検討した。本論では、これらの著作の内容を検討し、『訓蒙窮理図解』の内容と比較して、西洋文明の中核である科学知識が一般の日本人にどのように紹介・啓蒙されてきたかを考察した。最後に、本論で検討してきた西洋と日本の科学書とはまったく異なるタイプの、イスラーム教の学者であるムハンマド・アブドウ(1849-1905)の科学知識の啓蒙の仕方を参照することによって、福沢の特徴をより明瞭にした。

以上の事を検討することによって、福沢の特徴を次の点にまとめる。福沢の啓蒙の仕方の特徴の一つは、素読、暗記など当時の日本の教育・教授方法と異なり、分かり易い図解を媒介として理性を用いて科学知識を人々に伝えたことである。『訓蒙窮理図解』が出版されるまでは、科学知識に関して日本で出版された書物は専門的であり、ほとんど漢文か和蘭語に基づいて翻訳・解説されたものであった。ところが、福沢は欧米へ渡ったことがきっかけで、日本に不足し、ほとんどの日本人が聞いたことがない科学知識を一般の人々に教える方法論を見つけた。

『訓蒙窮理図解』と西洋人の科学書を比較してみると、福沢と彼らは同様な内容を紹介している。だが、福沢が翻案した部分を見ると、いかにも分かりやすい日常の用語を使用して、図を多用し、子供や女性にも理解しやすいように配慮していることが分かる。そして、彼は、長い文章を使用せず、様々な理論を簡潔にして、科学的用語、定義、理論を越えて、図解などの説明によってどのように応用できるかを説明した。また、『訓蒙窮理図解』と当時の日本の知識人の科学書のもとは、ほとんど同様な西洋の科学書であるにもかかわらず、西洋の初心者と日本の初心者の差異を認識し、対象を置換することができたのは福沢の天才性である。これらの書物に紹介されている知識と図解を見ると、福沢と全く異なっている。例えば、これらの書物には、漢文と難しい日本語で書かれている上、一般の日本人が日常生活において滅多に見ることのない例文と図解が用いられているので、本の文体と内容は、『訓蒙窮理図解』と比べると、はるかに理解し難いことが多くある。また、福沢は、西洋の科学書の書物の内容と説明のし方、図解などを日本風に適応改変し、西洋人と全く異なる日本の婦人と子供に相応しく衣服、髪形、動き等を日本化した。こうした特徴的な説明の仕方と図解の用い方は、福沢が発明した手段ではないし、近代科学を啓蒙することも彼が初めて行ったわけでもない。だが、真にユニークな教育家、才能ある啓蒙家の独自性は、以前に全く存在したことがないことを新たに作り出すという点にあるわけではない。むしろ、色々な物をその時代に人々が欲しがっている形で最もユニークで効率的に啓蒙する人である。福沢の時代に、数多くの知識人と啓蒙家がいたわけであるが、その時代にうまく合う人と合わない人もある。つまり、福沢だからこそ、そしてこうしたやり方であるからこそ、彼の著作がベストセラーとなり、彼の考えが人々の間に普及したと思う。福沢は、日本人と日本社会の要求、そして1860年代という時代の要請を読めたことによって、他の啓蒙家以上にユニークな説得・啓蒙の仕方を考え、その結果、彼の考えが一般の人々の間に浸透したのである。

また、福沢の特徴の一つは、西洋の科学書の読み替えと排除である。福沢が使用していた西洋の科学書においては、多少なりとも宗教的な意義があったことは明らかであるのに、福沢はこうした近代西洋科学の背景にある思想的な伝統を考慮していない。福沢の科学知識の啓蒙思想の特徴は、西洋の科学書に書かれた知識を日本の風土に合うように置き替え、西洋人の著者がキリスト教のモラルとして分かり易く説明している個所を抜きにして、日本人の日常生活に役に立つ知識を実用主義的(合理主義)に選んで翻訳(翻案)した。福沢は、西洋の科学書に述べられている神に関する記述を排除している。実は翻訳に際して福沢が

原著にある自分の考えに適合しない箇所を大幅に修正、又は無視したことがよく知られており、特に宗教（キリスト教）に関しては著しかった。

福沢とアブドウの最たる相違点は、科学知識と伝統との関連性に対してとった態度である。福沢は、一般の人々にまで近代科学知識を広めたいという動機ははっきりしている。一方、アブドウは、コーランを解釈することに関して様々な目的があると主張する。その中で、最も重要な目標は、イスラーム教を通じて人々を此世と来世での幸福へ案内することである。そのため、イスラーム教徒は、コーラン（つまり、アッラーの言葉）を完全に理解することができるように、人間や自然、宇宙などに関する科学知識を学ばなければならないと主張している。また、アブドウは、科学知識を身につける方法において、福沢とかなり相違している。アブドウは、近代科学主義が必要だと見なしているが、福沢を含む近代科学主義者が使用しない手段（心・良心・意図など）や価値規準に基づいて採用しようとしている。一方、福沢は、科学知識に対するだけではなく、現実的な証明ができない道徳や宗教などの絶対性も否定し、その内容は文明の進歩につれて変化することを強調している。

福沢とアブドウの相違点は、西洋文明がそれぞれの国に引き起こすであろう有益と有害について比べた結果の違いであると考えている。おそらく福沢の考えの中心は、西洋文明かどれ程利益を引き出すかという関心が第一であったのに対して、アブドウは西洋文明の有益性を薦めているが、そこから及ぼされる有害な結果を見越してイスラーム社会が悪化することを懸念している。つまり、このままの形で西洋文明を採用すると、西洋諸国と同じようになり、イスラーム教徒にとって最も必要である伝統（イスラーム）に危険が及ぼされることを懸念しているのである。アブドウが考える独自の近代化とは、福沢の目指した近代化ではなかった。アブドウは、日本について言及したエッセーの中で、日本人は近代化に成功し、発展しているよう見えるが、彼らの幸福は表面的だけであり、「成功は幻影だけである」と述べている。アブドウは、物質の豊富さ、生活の豊かさなどの表面的な形を目指す近代化ではなく、神の導き、精神の穏やかさと落ち着き、心の安らぎなどに基づく近代化を目指しているようである。一方、福沢は、「利害得失」という基準によって、自由に知恵を働かす科学主義的な思考法に基づいた近代的学問を身につけさせることが必要だと考えている。日本人は科学主義的思考法を身につけないと、いくら科学や経済、政治などを導入しようとしても理解しにくくなり、近代国家が成り立たないと、福沢は考えていた。

19世紀に流行っていた近代化の試みは、福沢を含め、ほとんど西洋化と同義であった。福沢は、『文明論之概略』において、欧米は文明のトップであり、日本などの発展途上国は「半開」に位置しているので、全ての世界が欧米のようになることを主張していた。その一方でアブドウが考えた伝統と西洋の科学主義とが調和する近代化は、おそらく福沢には思い浮かばなかった。福沢の考えた近代化は、西洋式であり、科学主義を全面的に採用しないと、日本の近代化が実現しないというものである。

論文審査の結果の要旨

ハルブ氏の論文は、明治時代における日本の近代化の過程で巨大な足跡を残した福沢諭吉の啓蒙活動を主題とする。福沢に関する研究は既にやり尽くされたと言われる状況の中で、科学的知識を扱った著作については未だ十分に調査がなされていないのが現状である。ハルブ氏は福沢の啓蒙の手法に関心を持ち、特に『訓蒙窮理図解』を取り扱った。その理由は、上記の通り、本書に関する数点の論文において彼の啓蒙の手法について言及がなされているものの、その扱いは不十分であるためである。論文審査において評価された点は、以下の通りである。①同書が出版された前後の科学的知識を扱った他の日本人著作家の書物との比較がなされている点、②『訓蒙窮理図解』を執筆する際福沢が参照した英文原書を徹底的に調査し、それとの関係を明らかにした点、③同時代エジプト人の中で傑出した知名度と影響力を持った啓蒙思想家ムハンマド・アブドウの著作との比較検討を行った点である。一貫した実証主義、原典主義に対して高い評価が下された。

一般に、同世代の日本人学生にとってすら読解が困難な幕末、明治期の資料を広汎に駆使して比較対照した点は、留学生という立場を考慮して、かなり高い評価が与えられた。

福沢は『訓蒙窮理図解』を執筆するに際して自ら述べているように、Chambers, Swift, Quackenbos, などを参照した。既存の研究論文では、この事実に言及する作品はあるものの、実際に福沢がどの著者からどの部分をどのように参照したのか、具体的な検討はほぼ全くなされてこなかった。ハルブ氏は『訓蒙窮理図解』と上記原典の突き合わせによって、福沢がどの著者のどの箇所を参照したかを具体的に明らかにした。結論的には、特に Swift の First Lessons on Natural Philosophy for Children から年少の子供、女性に対して科学的知識を啓蒙する技術、アイデアが得られたことを突き止めた。

福沢の啓蒙思想家としての特質を一層際だたせるために、福沢とほぼ同時代を生きたエジプト人、ムハンマド・アブドウを比較の対象とした点は、日本語日本文化専修コースで学ぶ留学生の強みである。日本文化、歴史を外国人の目で自国の文化・歴史的伝統と比較しながら眺めることができるからである。確かに、福沢の特徴をより一層明確に理解する上で、他国の事例と比較検討するというのは一つの有効な方法である。福沢がどちらかと言えば、近代西洋流の科学主義的傾向を持つのに対して、アブドウは明確に唯一神アッラーの権威を議論の最終根拠としている。この一見単純な比較によって、福沢の啓蒙思想家としての特性が浮き彫りにされた効果がある。

最後に、ハルブ氏の論文は達意な日本語で書かれており、明らかに標準を超える点が高く評価された。

以上の諸点が評価されたが、他方、正確な論文作成の手順を踏んでいない点がいくつか見られる。この欠点が審査担当者から指摘され、修正するよう指導があった。

以上の論文審査の結果、論文審査担当者は、全員一致で氏の論文は日本語・日本文化の博士号に相応しいと判断した。